

この道



「西王母」…2002年、大島能楽堂
でシテを勤めた舞台



(上)衣恵四歳仕舞…4歳頃の舞台
後方に祖母、地謡に祖父と父
(下)「月宮殿」…弟と共に稽古し、
相舞を務めた舞台

〈私の座右の銘〉

「時々の初心忘るべからず」
世阿弥の言葉。人は常に初心の者であるといふ謙虚な姿勢の重要さを説く。時々とは、青年期、壮年期、老年期それぞれに向き合うべき課題があり、周囲の声に耳を傾け、学び、工夫して壁を越えてゆくようにとの言。

伝統文化に学ぶ楽しさ

喜多流能楽師 おおしま きみえ
大島 衣恵

プロフィール〈略歴・受賞歴〉

- 一九七四年 東京都に生まれる
- 一九七六年 広島県福山市に転居
- 一九七七年 能「鞍馬天狗」稚児で初舞台
- 一九九七年 東京芸術大学音楽部邦楽科能囃子卒業
- 二〇〇〇年 台北芸術大学で学生の指導及び能楽公演
- 二〇〇二年 喜多流能楽師として活動を本格化
- アメリカ、ヨーロッパ各地で能公演
- 二〇〇六年 アメリカでの能楽指導に招聘される
- 二〇〇七年 広島県教育奨励賞
- 二〇〇九年 英語能シテを勤め欧州公演
- 二〇一八年 広島文化賞受賞
- 二〇二〇年 パリ太陽劇団で能楽指導
- 二〇二三年 パリ太陽劇団の劇場にて能公演

「能の道は楽しい面白いものでなければならぬ」と能楽師の祖父はよく口にしていた。本当に楽しいとは、面白いとはどういうことであろうか。能楽堂のある家に生まれ育った私は、物心が付く前から能の稽古を始めていた。私にとって能の稽古は楽しく面白いものだった。師である祖父・久見はいつも本気で一生懸命。むしろ稽古は厳しかったが、その厳しさは芸に向かう姿勢であり、情熱の表れだった。できない自分が悔しくて涙したことはあるが、稽古が嫌になったことはないのだ。私たち四人の姉弟は祖父の情熱に引張られて育ってきたし、祖父が亡くなった今もその背中を追っているように思う。

稽古は厳しい反面、本番の舞台を務め終えると、祖父だけでなく大人たちが口々に褒めてくれた。時には間違えたり、上手くできなかったりすることもあるはずだが、それを叱られた覚えはない。結果よりも過程を大事にして、次に向けてのやる気を育てるという方針だったのだと思う。能の大成者世阿弥も、子どもはのびのびと育て、やる気を失わせないことが肝要だと説いている。七百年前も現代も、大切なことは変わらないのだろう。

能楽の指導者として小学校に何うようになって二十年余り。本気の楽しさを伝えられれば、と念じて子どもたちと稽古に励んでいる。正座やすり足、古典の言葉を大きな声で謡うなど、日常生活にはないことを熱心に取り組んでくれる姿に、こちらがエネルギーをもらうありがたい時間である。近年、気がかりなのは、身体の軸を感じるのが難しい子どもたちが増えていることだ。身体の軸はそのまま心の軸とも言える。身体よりも頭脳を使うことが多い現代の生活ではやむを得ないところもあるが、本来、人間は身体と心を分けて考えることはできないはずだ。

能の謡や舞の稽古は、身体の軸を作ることに尽きる。しっかりした軸に支えられた身体を腰の力で安定して動かすことができるようになると、呼吸も整って精神状態が安定してくる。心の働きを充実させるためにはまず身体から、というのが日本の伝統文化全般に共通する教育方針だと思ふ。伝統文化は古いから大切にしなければならぬのではない。先人の知恵の宝庫が、伝統文化なのだ。今こそ、伝統に学ぶものは大きいのではないだろうか。